

# 古代ギリシアの聖地

## ——エレウシースの秘儀——

横浜国立大学名誉教授 高野義郎

古代ギリシアの文化というとき、まず思い浮かべるのは、ホメーロスの叙事詩であり、そして、澄み渡った青空の下に聳え立つ神殿の白い大理石の柱であろう。ホメーロスの叙事詩『イリアス』、『オデュッセイア』に漂ううららかな春の趣き。大理石の神殿の跡に佇むとき、体中から込み上げてくる生の喜び。この明るく、生き生きとしたギリシアの文化に、何か悲哀の影を落すものがあるとすれば、それは神々の世界と人間との越え難い隔りであったのではな

らうか。

実際、古代ギリシアの箴言には、「汝自らを知れ」、「人間は万物の尺度なり」と人間中心の思想を謳うものがあると同時に、「度を過すなかれ」、「程よきこそよけれ」、「人間は影の幻」、「はかなきものにははかなきことこそふさわし」、「汝死すべき者なるを忘るるなかれ」、「人は生れざること、日の光を見ざることこそもつとよけれ」など、節度と、不死ならぬ人間の諦念を説くものも多いのである。

また、アッテイカの墓碑（アッテイカはアテネのあたりの地域）に刻まれた、親しい人との別れに臨んでさえ、そのつつましさを失わない人々のたたずまいには、心打たれるものがある。ドイツ象徴派の詩人リルケも、その詩『ドウィノの悲歌』第二にいう、

おんみらはアッテイカの墓碑に刻まれた人間のたたずまいのつつましさに

息をひそめたことはなかったか

愛と別れとは私たちの場合とは別のものでできているかのように

そつとふたりの肩の上におかれているのではないか

想いたまえふたりの手を

からだには力が満ちているのに

その手には力がこもることなく触れ合っているのを

自らを抑えているこの人たちは知っていたのだ

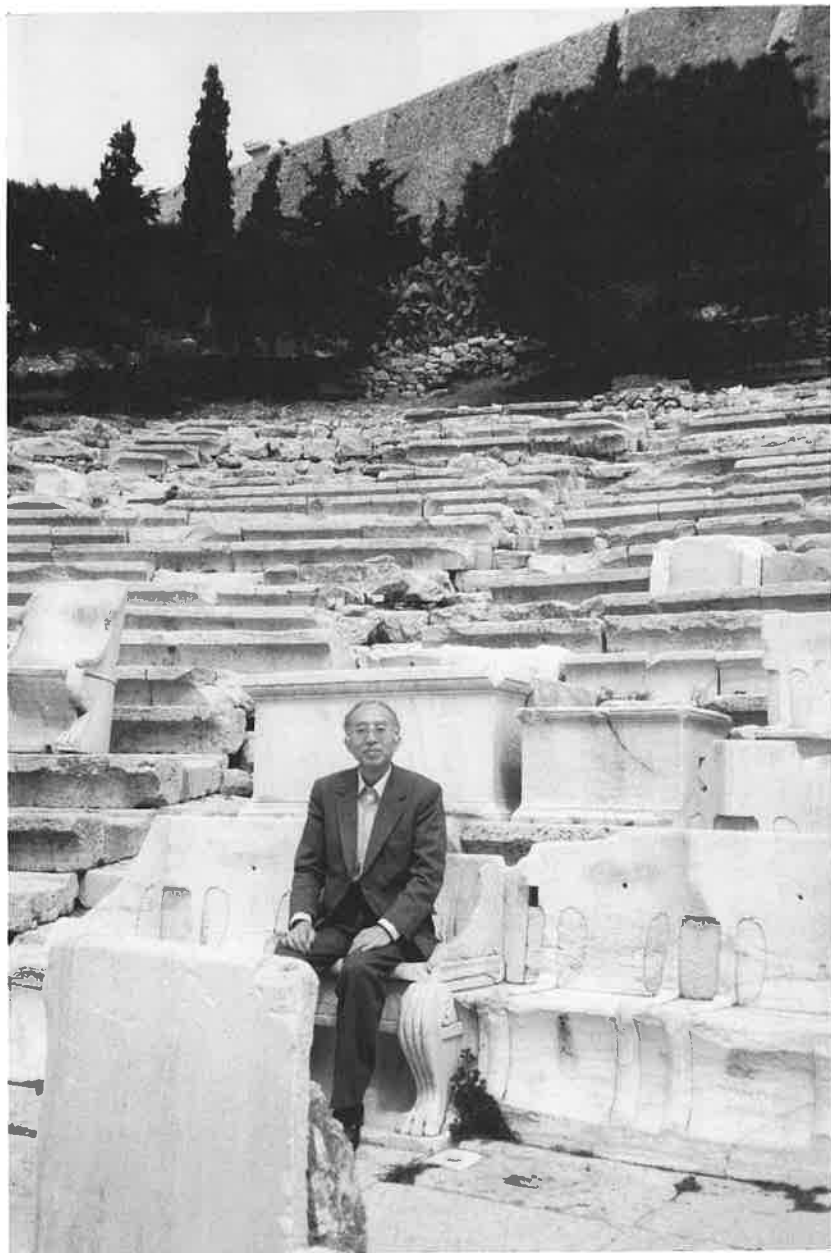
これが私たちのなしうる限りであることをそのようにそつと触れ合うことが

私たちのありようであることを

アテーナイ（アテネ）のアクロポリスの丘の西北に広がるアゴラー、この民主政治の中心からさらに西北に、ケラメイコス墓地がある。

日の沈む西の方に冥界をイメージするのは、多くの民族に共通するところであろう。ここケラメイコスの墓地や、アテーナイの国立考古学博物館に、私たちは数多くアッテイカの墓碑を見ることがができる。『ヘゲソの墓碑』はその代表的なものといえよう。

ケラメイコスからさらに西へ、少し北よりに進む道は、エレウシースへ通じており、「聖なる道」と呼ばれていた。エレウシースには、二柱



筆者・ディオニューソス劇場（アテーナイ）



「ヘゲソの墓碑」

(前四一〇年ごろ、アテネ国立考古学博物館所蔵)

の女神、母神デーメーテルと女神ペルセポネーとを祀る神殿があり、死と再生にかかわる秘儀がここで行われていたのであった。

ちなみに、エレウシースは悲劇詩人アイスキュロス生地であり、聖なる道の北側には、プラトーンの学園アカデメイアがあった。さらにその北側がコロノスで、悲劇詩人ソポクレー

の生地であり、あのテーバイの王、オイディプースが亡くなったところともいわれている。

筆者が二人のギリシアの友達とエレウシースを訪れたのは、一九九〇年の春、四月七日のことであった。

神域の最初の門、大門は、アクロポリスの低い丘を背に、石畳の広場を前にして、東北に向かつて開かれている。前二世紀に建てられたものだが、今は基壇と、僅かに柱の下部を遺すに過ぎない。春の盛りのこととて、白い大理石の敷石の間から、真紅のひなげしがあちらこちら顔を覗かせている。

大門の向かって左に、カリコロンの井戸がある。聖なる道は、大門よりも、むしろこの井戸へ向かって付けられているように見える。神話によれば、娘ペルセポネーを探しあぐねたデーメーテルは、この井戸の側に腰を下して疲れを休めたという。水は涸れているが、丸い石の



大 門



カリコロンの井戸



アッティカ

井桁はそのままであった。

ペルセポネーはゼウスとデーメーテルとの娘であるが、冥界の神ハーデースは彼女を見染め、ゼウスの助けを得て、秘かに彼女を奪った。デーメーテルは、夜となく昼となく、炬火を手にして娘を探し求め、世界中を巡った。娘はハーデースにさらわれ、ゼウスも加担していたことを知って怒り、天界から姿を消した。その



デーメーテル女神像  
(前四世紀、クニドス出土、大英博物館所蔵)

ため作物は実らず、人々は困窮した。やむをえずゼウスは、ペルセポネーが、一年の三分の一を地下に、三分の二を母親といるように取り計った。デーメーテルは大地と豊饒の女神であり、ペルセポネーは穀物の種になぞらえられている。

さて、大門から約二〇メートルばかりで、第二の門、小門が真北に向かって開かれている。前四〇年に建てられたもので、ここも基壇と柱の下部を遺すのみだが、あとで訪れる博物館では、この小門を飾っていたカリアード（女性像を柱として使ったもの）の力強い彫刻を見ることがができる。

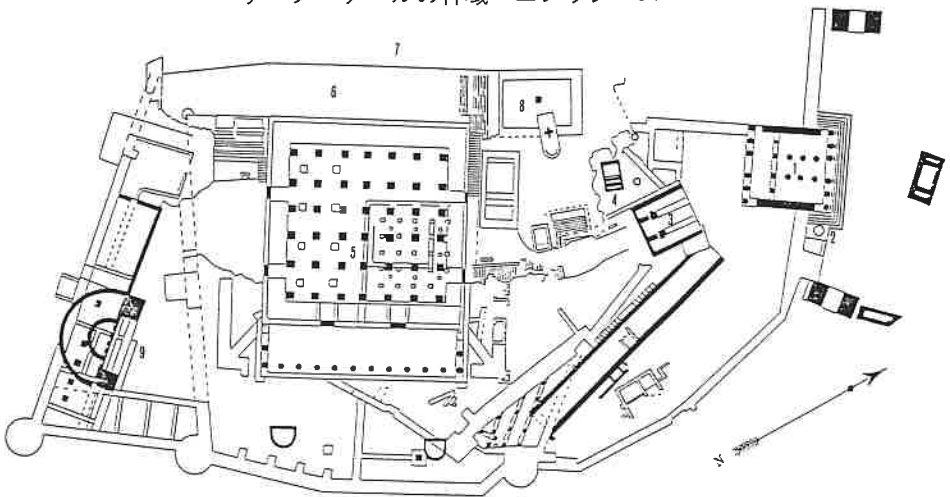
小門を入ると、向かって右はハーデースの聖域であって、アクロポリスの丘の下には、洞窟が黒々と口を開けている。ペルセポネーはここから地下へ連れ去られ、また、ここから地上へ戻ってきたと想われる。

デーメータールの神殿テレスターリオンは、小門から南へ五〇メートルほどのところにある。アクロポリスの丘を背に、東南に面して建てられている。前六世紀後半、ペイシストラトスの時代に建てられた神殿は、ペルシア戦争によって荒廃し、前五世紀半ば、ペリクレスの主導の下に再建された神殿は、間口、奥行ともに約二倍に拡張され、五二×五四メートルの、壮麗な方形の建物であった。さらに、ローマ時代に、修復の手が加えられている。しかし、多くの人々の崇敬を集めたこの神聖な秘儀の場も、今はところどころ基壇や柱の下部を遺しているだけであった。

ただ、神域全体にわたって、縦横に通じる地下道は今も見ることができて、その秘儀に果たした役割を想わせるのである。

エレウシースの秘儀は、前一四五〇年ごろ、エウモルポスによって創始されたと伝えられ

デーメータールの神域・エレウシース



- |            |            |               |
|------------|------------|---------------|
| 1 大 門      | 4 ハーデースの聖域 | 7 アクロポリス      |
| 2 カリコロンの井戸 | 5 テレスターリオン | 8 デーメータールの古神殿 |
| 3 小 門      | 6 テラス      | 9 ブーレウターリオン   |



る。秘儀の次第は、口外が厳しく禁じられていたため、ほとんど知られてはいないが、その神話にも寓意されているように、死と再生の秘儀であり、二柱の女神デーメーテルとペルセポネーとの導きによって、靈魂の不死を悟ったのであろうと思われる。

この秘密の儀式は、毎年春秋の祭礼の日に行われた。春二月は、予備的な浄めの儀式が、アグラのデーメーテルの神殿で行われ

た。ここは、昔アテーナイの東南を流れていたイリッソス河の左岸、アルデットスの丘と第一回近代オリンピック大会の開かれたスタディオンの間あたりにあった。秋九月の大祭には、前段階的なさまざまな浄めの儀式ののち、最終段階の秘儀が、このテレステーリオンで行われたのであった。

プラトーンの対話篇には、『饗宴』に、「見神に窮まる最奥の秘儀」、『パイドロス』には、「全き姿の、純粹で、莊嚴な、祝福に満ちた聖像を、明るく清らかな光の中に啓示され、それによって奥義を伝授されたときのことであった」、また、「肉体と呼ぶ靈魂の墓」などの表現が見られ、おそらく最奥の秘儀は、内陣において神像と対座することによって、靈魂を肉体から解放し、死すべき肉体に対して、靈魂は不死であり、本来神的なものであることを悟ったのであろう。

エレウシースはアテーナイからも近く(二二二



キロメートル)、入信者の中には知識人も多かった。ピンダロス、ソポクレース、イソクラテース、キケロらも、この秘儀について好意的に述べている。

また、ヘーロドトスによれば、ペルシア戦争において、ギリシア側の勝利を決定したサラミースの海戦のとき、エレウシースのあたりから大きな声が聞え、やがて雲が沸き起って、サラミースの方へ動いて行ったという。

さて、テレステーリオンの背後は、テラスになって、アクロポリスの丘へと続いている。デールメートルの古い神殿は、テレステーリオンの北の方にあつたらしい。

なお、テレステーリオンから南四〇メートルほどのところには、ヘレニズム時代の議事堂ブーレウテーリオンの跡がある。

さらに、テレステーリオンの西の方、アクロポリスの丘の南側に建てられた博物館を訪ねよ

エレウシースのテレステーリオン



う。

玄関を入ると、第二室へ繋がっていて、中央にデーメーター女神の人身より少し大きい目の像が飾られている。前四二〇年ごろのものとか。神像とはいえ、女体の魅力を隠そうとはしない。また、有名な『エレウシースの浮彫』も飾られているが、これは複製で、実物はアテネ国立考古学博物館にある。デーメーター（向かって左）とペルセポネー（右）とが、少年トリプトロスに小麦を与え、それを広めさせようとしている。さらに、同じ主題、『トリプトロスの派遣』の小さな浮彫が三つ、櫃に座ったデーメーターとペルセポネーの像、入信者の像なども並べられている。

第一室へ戻ると、中央に前七世紀のアンフォラ（二つの把手の付いた壺）、そして、前四八〇年ごろのデーメーターとペルセポネーの浮彫、聖獣豚の可愛い像（ローマ時代）、また、ニ

ンニオン・タブレットが飾られている。ニンニオン・タブレットは前四世紀のもので、その図柄から秘儀の様子を伺うことができる。ただし、これも複製で、実物はやはりアテネ国立考古学博物館にある。

第三室で見落してはならないものは、ディオニューソス（バックス）の像と、聖水盤捧持少女像とであろう。前者は、プラクシテレースの作品の、ローマ時代の模刻である。後者は、大理石の水盤を捧げ、もう一体と対になって、テレスターリオンの入口に立っていた。入信者たちはその水で最後の浄めを行ったのである。

ディオニューソスの像がエレウシースから出土したのはきわめて興味深いことといえよう。かつて、トラキアから伝来したディオニューソス崇拜は、暗夜、山上において、聖なる狂乱のうちに、神との合一を体験する、狂熱的な宗教であった。このような神秘的な体験によって、

デーメーテル女神像▶  
(前420年ごろ)



▼聖獣豚の像(ローマ時代)



◀エレウシースの浮彫  
——デーメーテル(左)とペル  
セポネー(右)とが少年トリプ  
トレモスに小麦を与え、それを広  
めさせようとしている——(前  
440—430年、エレウシース出土、  
アテネ国立考古博物館所蔵)

靈魂は本来神的な存在であることが実感され、  
靈魂の不死が信じられたのであろう。

このディオニューソス崇拜は、前六世紀、オルペウス教として、ふたたびギリシア各地に広まった。靈魂は罪によって肉体の獄ひじりに繋がれたのであり、肉食を避け、浄めの儀式を受けることによつて、靈魂の肉体からの解脱に達することができる。

外にも、プリュギア（現在のトルコの中央高



ディオニューソス像（ローマ時代）

原西部の地域）の豊饒神カベイロイの秘儀もあった。

古代ギリシアにおけるさまざまな秘儀や神話は、たがいに影響を及ぼし合いながら、ついにはエレウシースの秘儀に吸収されていったように思われる。オルペウス教の神話によれば、ディオニューソスはペルセポネーの子とされ、オルペウスも、前一五世紀、エレウシースに住んだという。そして、エレウシースの祭の初日、



聖水盤捧持少女像

集まってくる人々の列の先頭をディオニューソスの像が行くのである。

また、女神ヘーラーも、もともと地下神、地母神であって、その信仰も、エレウシースの秘儀を取り入れて豊かになっていったと考えられている。ヘーラーは、さらに、ゼウスの妃となり、結婚の神となるのである。

さて、第四室には、二柱の女神の小さな像が二つ、そして、ここにも、ディオニューソスの小さな像が見られる。

第五室では、先に記した小門のカリアードが見ものである。

第六室には、前二五〇〇年、青銅器時代からの壺や小さな器物が並べられている。とりわけ面白いのは、ケールノスと呼ばれる祭具で、秘儀に使われたものと思われる。これは入信者の頭へ載せたものようで、いくつもの盃状の突起があり、それらに農作物の種子や、蜜、ぶど



祭具ケールノス

う酒、油など、女神への捧げ物を入れたと考えられている。

最後に、「聖なる数」について述べておきたい。エレウシースの大祭は一〇日間であった。それは、デーメーターがペルセポネーを九日間探し求め、一〇日目にエレウシースへ辿り着いたことに由来する。前六世紀後半のテレステীরオンは、正面に一〇本の柱を持つ数少ない例であろう。また、秘儀の最終段階は五段階であったといわれているが、全段階は一〇の倍数だった

のではなからうか。すなわち、エレウシースの秘儀においては、一〇が聖なる数であったように思われる。一〇は偶数であるから、柔らかで、暖かく、女性的、農耕的なニュアンスを持っている。

先に記したヘーラー信仰も、さまざまな考察から、やはり一〇が聖なる数であったのではないかと思われる。

多産と豊饒、死と再生の宗教において、聖なる数を一〇とするのは、人間の受胎から出産までが一〇ヶ月であることに起源するのではあるまいか。

ちなみに、直角三角形についての定理で有名なピタゴラスの教団も、一〇を聖なる数としていたことはよく知られている。一〇||一+二十三十四、すなわち、完全な数であった。宇宙は、中心火のまわりに一〇個の天球が回っている。すなわち、恒星、五つの惑星、太陽、月、

地球、そして、対地星の天球であり、見えない星、対地星を加えたのは、数を一〇にするためであることはいうまでもあるまい。そして、これらの天球は、大きさに応じ、速さに応じて、それぞれの高さの音を生じ、全体として調和ある音楽を奏でているのである。

また、この教団では、霊魂が輪廻転生の苦しみから解脱するためには、数学や音楽によって浄められなければならないかった。

そして、ピタゴラスの生れたサモス、教えられたクロトーン、メタポンティオンのいずれの都市にも、壮麗なヘーラーの神殿が聳えていたのである。

オルペウス教が動的、感覺的であるのに比べ、ピタゴラスの教えは静的、理知的であって、聖なる数一〇とともに、デーメーター・ヘーラーの流れを汲むものと考えられるのではなからうか。